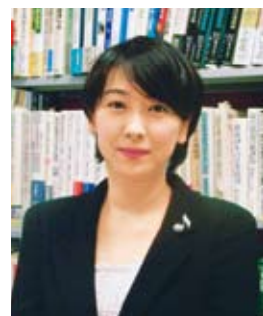


第三者意見書



立教大学 経営学部 教授
高岡 美佳 氏

CTCグループのCSRレポートに第三者意見を寄せるのは、今回で3回目となります。全体的には、年々、レポートが充実してきている印象を受けます。

評価できること

▶ 第1は、「本業を通じたCSR」というCTCのCSR活動の特徴が、一層の進化を見せていることです。CTCグループは、今回、グリーンIT戦略「CTC×GREEN」を打ち出し、「ITシステムの最適化」、「ITファシリティ環境の改善」、「グリーンなデータセンターの活用」の3つの柱を提供することで、顧客のシステムの全体最適化と環境負荷低減を同時達成しています。この3つの柱をセットで提供できることがCTCの強みであり、これは、「本業を通じたCSR」の発展型とみなすことができます。

▶ 第2は、CTCグループと社会との関わりについての記述が改善されたことです。レポートの5-6ページには、CTCグループの情報技術がいかにかサステナブル社会の形成に貢献しているかが、公共機関サービス、コンビニエンスストア、オフィス、データセンター、エネルギー・環

境部門、レストラン、携帯電話、家庭との関係において、わかりやすく図示されています。これは、CTCが情報技術を本業としている点から考えて、極めて重要なことです。というのは、情報技術産業のCSR活動のトータルな成果は、情報技術が使われる社会的場面まで視野に入れなければ、正確に評価することができないからです。

▶ 第3は、「社会に役立つ製品・サービスの提供」というCTCグループの社会性を重視する行動基準が、一層鮮明になったことです。レポートの26ページに掲載されている「有害サイトアクセス制限サービス」システムの構築の事例は、この点をわかりやすく伝える上で効果的です。たとえ顧客からの要請であっても、それがモラルに反することであればはっきりと断るというCTCの事業に対する考え方は、企業の倫理性に対する社会的要請の高まりやIT社会の深化にともなって、いっそう重要性を持つことでしょう。

要望したいこと

▶ 第1に、CTCグループがサービスを提供することによって、顧客の業務を通じたCO₂排出量がどの程度削減されたかを推計値でもよいので明示していただきたいことです。レポートの37ページには、CTC自体の環境負荷低減努力が書かれています。しかし、先に述べたように、CTCグループが低炭素社会の形成に貢献できる最大の現場は、社内というよりは、CTCの情報技術を採用した顧客の事業所です。顧客との関係などからいって、データを発表することは容易ではないのかもしれませんが、顧客の現場におけるCO₂削減量が明らかにならない限り、

CTCグループの真の貢献の度合いは把握することができません。

▶ 第2は、社員の長時間労働削減を進めていただきたいことです。この点では、2008年度、対前年度比10%削減を目指したにもかかわらず、結果的には、3.4%長時間労働が増加したことが問題です。この点について、19-20ページのアクションプランの表には、「実施」を意味するマークが付されています。問題は、「実施」したか否かではなく、成果をあげたか否かであるので、アクションプランのマーク付けにも改善の余地があります。